海國兵談第二巻　（現代語訳）

陸　戦

既に水戦を会得したので、陸戦の方法を理解せよ。先ず戦法とは、戦闘の法組（手法の組み合せ）である。日本諸流の戦法は、ほとんど法組が窮（きわ）められており、鉄砲、弓、長槍、武者の四段構えで陣立てし、六十間（約一〇九m）から三十間（約五五m）まで鉄砲で撃ち合い、それより十四～五間（約二五～二七m）に接近するまで弓で射合い、そこからは長槍のせり合いで鼻突き合わすようになり、そこで武者の勝負に出て切組むといったように大概のことは定まっている。現在では世の中の多くの人が、この切組みの他に合戦の仕方はないものと思っているが、接近戦の始まりはこれのみに限られるわけではないので、切組みと違った戦法の敵と出合えば、大いに狼狽することになる。全て軍（いくさ）（＝戦闘）は先を取るにある。先を取ることは、人の胆（きも）を奪うことである。その戦法に六つある。以下にそれらを記す。異国勢の備（そなえ）を砕くにも、是非ともこの術を施すべきである。

○敵が現代流の編成・装備により、楯を用いずに攻めて来るならば、両懸（もろかか）りや手詰（てづめ）懸りが良い。また、楯を用いて弓、鉄砲を厳重に備えて攻め寄せるならば、玉砕（たまくだき）が最も良い。また、敵が楯を用いずに鉄砲のみ数千挺備えて攻め寄せるならば、指矢（さしや）懸りが良い。また、敵が飛道具を夥（おびただ）しく備えて攻め寄せる時、味方に飛道具も多からず、楯も無く、その上兵員も少ないならば、乗崩（のりくず）れに勝る戦法はない。さらに、いずれの備をも押し崩す車掛りの戦法がある。ただし、これは平地でのみ用いるものである。

○両懸（もろかか）りというのは、楯を一面に突き並べ、その陰に弓、鉄砲を等分に組み合わせ、鉄砲を少々撃ちかけながら押し詰めて、敵との間合いが十四～五間（約二五～二七

m）になった時、鉄砲を次々に続けて撃ちかけ、弓は矢継ぎ早に二筋ずつ射かけて、敵が射すくめられてひるむ所を足軽の後ろに控えていた武士が持ち道具（刀）を打ち振って前後を顧みず、踏込み、踏込み斬り進む戦法である。弓・鉄砲の足軽も皆、その持ち道具を体の脇側に掛けて、武士に続いて斬込むのである。これを両懸（もろかか）りと云うのは、弓、鉄砲の両方で攻め懸かるという意味である。

○手詰（てづめ）懸りというのは、これも楯を一面に突き並べて、胆力があり意気盛んで力持ちの者二～三十人、六～七十人から二～三百人をも選んで、各人に大太刀、太棒、大薙刀等を持たせておき、敵との間合いが三十間（約五四・五m）程になったならば、楯持ちが足を早めて無二無三に敵との間合いを三～四間（約五・五～七・三m）に押し詰めて足を止め、その時に楯の陰からこれらの壮士が、少人数ならば一隊（で一正面から）、大人数ならば二隊（二正面から）にも三隊（三正面から）にもなって、剛気（ごうき）無慙（むざん）に敵中に割って入り、縦横無碍（じゅうおうむげ）に斬り込ませる戦法である。後の軍勢もこれに続いて駆立てるのである。これは、味方に飛道具が無いときの攻撃初動に特に適したものであると云えよう。

○玉砕（たまくだき）と云うのは、楯を一面に突き並べ、飛道具に大砲を加えて備えておき、小銃を無秩序に撃ちかけながら敵との間合いを十四～五間（約二五～二七m）に押し詰める。そして、保有する全ての大砲を次々に続けて発射して敵の肝を冷やし、そこへ小銃を一斉に撃ちかけて、いよいよ敵のひるむ所に煙の下から武者も足軽も無二無三に切り込んで、乗り越え、乗り越えて進撃する戦法であり、敵を破ること疑いなし。

さて飛道具の数は、人数の多寡に従うべし。大砲については、鉄製の砲身と鉛玉では重くて取り扱いや移動が不自由である。そこで、たかだか数町（一町＝約一〇九・一

m）程度の戦場で敵部隊を砕くまでのことであれば、木製の砲身と煉玉を用いるのが良い。これらは軽くて便利である。製法は器械の巻に出しているので、参照せよ。

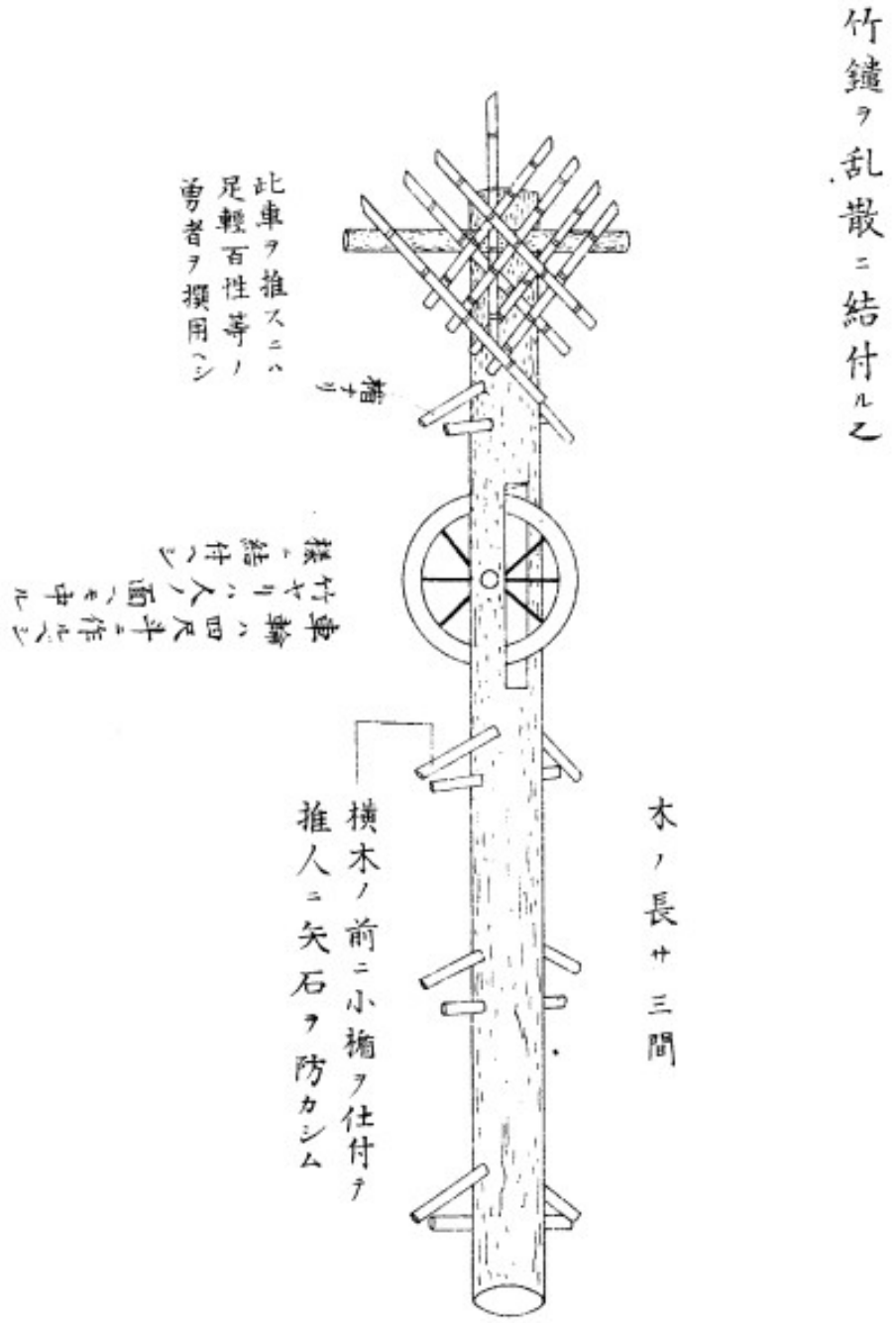
○指矢（さしや）懸りというのは、敵が大量の鉄砲を先に立てて攻めかかり、味方を撃ちすくめるならば、こちらは射手数百人を揃（そろ）えて矢種を惜しまず、指矢（さしや）で射かけて敵を射すくめて、鉄砲を発射させない。その時に左右の側面から攻め入って破る戦法である。この指矢懸りでは、弓家だけが第一の働きをなすので、鉄砲撃ちには全く納得できない攻め方であると聞き伝えられている。

○乗崩（のりくず）れについて。敵が大量の飛道具を備えて、隙間も無く攻めかかるとき、味方には飛道具が不足しており、しかも少人数であれば、通常どおりに戦っては必ず打ち負かされるものである。そのようなときには、乗崩（のりくず）れに勝る戦法はない。この戦法は、強い馬を前に立てて二～三十騎、又は五～六十騎から百騎二百騎であろうとも、主君の大事はこの一戦にありと、命は塵芥よりも軽く、忠義の一念に軍神の来臨を請い奉って、前後を顧みず、無二無三に敵の隊中に乗り込む。これに続いて歩兵も斬り込むものである。馬の突入要領には三とおりある。それらを左に記す。

騎馬が三十でも、五十でも一隊となって、敵隊の真中に乗り込む。これを一口入れと云う。又、二隊に分かれて敵備の両端から乗り込むことがある。これを二口入れと云う。又、二隊に分かれて一隊は敵の正面に乗り込み、一隊は脇に乗り廻らして横合いから乗り込むことがある。これを廻（まわ）し入れと云うのである。右の何れも馬を突入させるには、（敵の）人数の厚い方に乗り廻すようにせよ。薄い方に乗り込むときは、（罠にはまって？）撃ち殺されるものだと云われる。

○車懸りと云うのは、下の図にあるような単輪の長車を用い、一つの車を八人で押す

ものである。この車を備に応じて十車、或いは二〜三十車も用意して陣前に押出し、敵との間合いが十間（約十八・二m）程になるまでは、静かに進め。そして、太鼓の合図に従って無二無三に敵部隊の中に押込むのだ。人をも馬をも押し倒すのである。それに続いて武者が斬り込めば、勝ちを取ることは疑いない。もっとも、この車の押し方は、事前に十分操練しておかねばならない。



○敵が馬による突入を図るときは、早いうちに敵のいる場に出向いて、馬の前足を薙(な)ぐ（＝刀などを横に払って切る）ようにせよ。こちらの備に乗り込まれたならば、必ずや崩れかけていくものであると知れ。

○敵が大量の長槍を備えて押し来るならば、先ず射手を進めて散々に射立てるようにせよ。射られてひるむところに武士が抜刀して無二無三に飛び込め。手詰めの勝負（＝至近距離での戦闘）は長槍の不得手なものであるから必ず破れるのである。

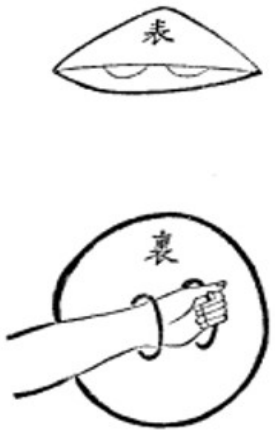
○右の他にも、異国では車戦、すなわち車を馬四頭に牽(ひ)かせ、車の上は生牛皮にて張り固め、その中に十人ほど載せて、敵陣に馳せ込むのである。それに続いて騎馬も歩兵も突入して敵を破る術がある。又、『ケレイキスブック』に、小さな家屋のようにこしらえて、四方を生牛皮で張り固めたものを象の背上に負わせて、その中に戦士二十五人を載せて、（内一人は象使いである）敵陣に駆け込む術がある。こうしたことは将帥の機転次第であり、土地と人数とをよく計って製作し、用いるべきである。とかく合戦の道は、世の中に無い形を創意工夫して勝ちを取ることが肝要である。（荻生徂徠先生もしばしばこの意を述べておられた）

○敵と対陣して戦(いくさ)を決しようと思うときは、先ず戦場を見ておかねばならない。地形は戦をたすけるものなので疎かにしてはならない。地形については九巻目に記す。

○備を押出すには、必ずだしぬけにしてはならない。できるだけ多くの物見を四方へ遣わし、障碍(ささわり)が無いことを確認した後に押出さねばならない。

○近世になりほとんど楯を用いなくなった。これは皆がただ力戦だけを合戦の主流と心得ているので、楯などを用いるのはまわりくどい事のように思えて、合戦の仕方も古よりも軽薄になってしまったからである。その上、近世は鉄砲が流布して、合戦の次第も鉄砲が無かった以前よりも一層ひどくなってしまった。これらを鑑みても、

楯を用いてこそ良将の戦法なのだから、楯というものを再び一般化すべきである。さて、楯については百姓・商人らの意気盛んな者に持たせるのがよい。この役目は、ただ楯を持って前陣に立つだけであって、合戦に直接携（たずさ）わることは無いので、百姓・町人等を用いても何ら問題無いであろう。又、一枚楯に穴を穿ち、鉄砲を貫いて、直に鉄砲足軽に持たせるものもある。さらに支那、オランダの戦法に、生牛皮にて笠の形にこしらえた楯を、戦士毎に持たせるというのがある。（百姓らに持たせないのは）これには稽古を重ねて熟練する必要があるからである。その図を左に紹介する。この他にも楯の構造には様々なものがある。これについては器械の巻に記述がある。



支那では「藤牌」と云い、オランダでは「シケルド」と云う。左手にこれを持って面を防ぎ、右手に剣を持って敵に当たるのである。

○近世になり大砲が出現して種々の奇術があると云えども、ただ城攻めと籠城にのみ用いて、野戦に用いることを知らない。兵術に携（たずさ）わる者は、工夫して大砲を野戦に用いれば、大戦果を収めるであろう。創意工夫を加えよ。

○双方が軍勢を押出すときは、初めに物見を出して十分に敵の様子を偵察し、突破口をどこにするかを定めてから軍勢を押出さねばならない。そうして敵との間合いが五～六町（約五四五・五～六五四・五m）になるまでは平常の足並みで行進させて、四町（約四三六・四m）程になったなら鐘を鳴らして軍勢を止めて居敷（おりしけ）（＝片ひざをついてしゃがむ姿勢）をさせ、新たに太鼓を打って軍勢を前進させる。その方法は、太鼓一声に一歩ずつ進ませよ。間合いが詰まれば詰まる程、この方法を厳正にせよ。さもなければ、（陣形が）正しく整わないのである。

○敵を踏み破り逃げる敵を追撃するには、一町半（約一六三・六m）から二町（約二一八・二m）で追うのを止めよ。追い行く時、備を乱し、足を乱して急いで駆けてはならない。互いに左右を見合わせながら追い行くのである。書経に「六歩七歩を于（ゆ）きて愆（あやま）らず、乃（すなわ）ち止まりて齊（ひと）し」「四伐五伐、六伐七伐を于きて愆らず、乃ち止まりて齊し」とあるように、聖人の軍法でさえも長追いを禁じていたのである。もちろん、鐘を鳴らせば速やかに足を止めねばならない。止まらない者は有罪となる。

○長追いを禁じる理由は、敵が必死になって取って返し、死に物狂いの行動に出たときは、却って手に余ることになるからである。そうは云えども、その敵国まで追詰めて根を断ち、葉を枯らす見込みがある時は、太鼓を騒がしく打ち鳴らしながら追詰めねばならない。義興（新田義興）、太閤（豊臣秀吉）、西涼州の馬超（ばちょう）（＝後漢末期から三国時代にかけての蜀漢の将軍）の働きなどを考察して理解せよ。

○逃げる敵を追撃するのに心得がある。旌旗（せいき）（＝軍旗）がそろい、足並も乱れず、士卒が後勢を返り見、返り見ながら逃げるのは、真の敗走ではなく虚敗（そらにげ）（＝偽りの敗走）である。追ってはならない。妄りに追えば、伏撃か反撃に遭い、却って敗軍することになりかねないので慎重に行動せよ。又、旌旗も乱れ、足並もそろわず、兵器さえも投げ捨てるのは、真の敗走である。追詰めてこれを撃滅せよ。

○激しく突進してくる敵に対して、我が虚敗（そらにげ）して、あるいは伏兵を設け、あるいは反撃して討ち取ることがある。そうは云えども敵将が心得ある者であれば、虚敗の手に乗らないものである。それゆえに虚敗のやり方がある。旌旗を乱し、兵器を捨て、足を高く上げて走るのである。敵将に智あるがゆえ、却ってこの手に乗ることがある。全てこの類のことは、将がその才能を活かして発揮することにあるのだ。

○我が虚敗（そらにげ）するときは、その合図としては旗や馬印等を伏せては起し、起しては伏せながら走るようにせよ。もっとも事前に操練することにより、この約束事をしっかりと教えておかねばならない。

○（虚敗ではなく）実に逃げることを恥とのみ思えるのは戦の道に暗いからである。勝負は時の運によるものであれば、名将と云えども負けることはある。その時に奪回する見込みが無ければ、馬を急ぎ走らせ、人が早足で駆けて逃げることもあるのだ。総じて名将が逃げるには、その逃げ方が甚だ上手であるものだ。漢の高祖や足利尊氏卿の逃げ方から学べ。そうは云えども、いつでも逃げることを心がけよと教えているのではない。時に臨んでは上手に逃げよと云うことである。

○敵を撃退したならば、自軍の侍大将、番頭は、旗幟（のぼり）、馬印をその場所に立て定めて人員を集合させ、負傷者と戦死者を調べ、戦功の大小を吟味して全て記録し、主将の上覧に入れること。

○敵を撃破した侍大将、番頭には、時宜によって即時に感状を賜わることがある。又、将士ともに褒美として禄を賜わることもある。

○敵を撃破して、確かに味方の勝利であるならば、旗本にて五々三の貝を吹きたて、勝鬨（かちどき）を挙げよ。これは軍神を祭る意味があるとともに、軍の勢いを増す術でもある。

○負傷者には介抱人を添えて薬を与え、戦死者にはたとい子弟がいなくても母、妻女等に遺品を相違なく申し渡し、嗣子（ししし）は後日に定めること。

○先手（＝前衛）が敵に追立てられそうで進みかねていれば、すぐに二の見（＝二番手）により敵の横から突入せよ。これ即ち奇正の術である。先手がすでに追崩されて足並みを乱していれば、突入しても戦況をひっくり返すのは困難であろう。又、先手

が崩れかけているのを見て、素早く横合から騎馬を突入させるのも良い。いずれにせよ、こちらから敵側面に突入しようとするときは、敵の二の見（＝二番手）も押出して共に交戦してくるものである。その時は敵の二の見には目もくれず、味方の一の手と協同して攻めかかり、敵の先手の備裏（＝背面）を第一に打撃せよ。こうした行動は、全て道理にしたがい神速になさねばならない。

○先手、二の見（二番手）ともに追立てられて、旗本に崩れかかるときは、旗本の楯を一面に突き並べ、楯の陰から長槍を斜めにして半ば指出し、石突を土に突き止め、兵の身は居敷（おりしけ）して厳しく固め、崩れかかる味方を一人も旗本に受け入れてはならない。その隙に右備は右から、左備は左から廻って挟み討ちにせよ。又、このようになるときは、味方の前遊軍は素早く一方に駆け込んで、越働（こしはたらき）（＝超越攻撃）をせよ。越働の仕方は、味方を追って来る敵の先手などには目もくれず、敵の旗本へ無二無三に突っかかって、必死の一戦を遂げるのである。こうした行動は電光（いなびかり）のようにせよ。このようにすれば、却って味方の勝利にさえなる。疑うことなかれ。いずれも機転と武勇とに因るものと理解せよ。

○敵からこちらに越働（こしはたらき）を仕掛けるときは、すぐにその様子を見きわめ、第一第二の備は当面の敵に当たり、左右の備の中、どちらでも近い方が越働の敵に当たれ。もちろん、遊軍、又は旗本の部隊の一部も分派して、越働の敵に横から突入させよ。

○川を渡る敵であれば、半渡を討て。半渡とは、敵勢の半分程が川に入った時を云う。

○押し寄せてくる敵を待受けて討つのに六つの方法がある。一つには伏兵を用いて討つ。二つには中途に出向いて討つ。三つには駐屯地に着いて未だ整列していないところを討つ。四つには兵糧を使っていないところを討つ。五つには敵軍の一部だけが

到着した夜に討つ。六つには敵の全軍が着陣した翌朝未明に討つのである。これらが待軍（まちいくさ）の代表的な方法である。

○待軍（まちいくさ）には、味方の駐屯地に虎落（もがり）（＝竹を筋違いに組み合せて縄で結び固めた柵や垣根）を二重三重に囲むように構成し、鉄砲、大砲、弓弩を備えて待つようにせよ。

○田単は火牛を用い、韓信は嚢沙（のうしゃ）の計（＝土嚢を用いた水攻め）をなし、李靖は艾葉（がいよう）（＝ヨモギの葉）に火をつけて諸鳥の足に結びつけ、これを追い放って敵の営を焼き、『春秋左氏伝』（＝左丘明が作成した『春秋』の解説書）に、虎の造り物を陣前に押出して、敵の馬を驚かして破ったという記事もある。この類のことは児戯に似ているが、その効果は甚だ大きい。才覚次第で製作すべきである。

○時と場合によっては、小荷駄車を真先に押出し、車の陰から弓、鉄砲にて撃ちすくめることもある。敵が押し寄せて来ても、車に隔てられて進むことができない。その時、味方は適宜の頃合を見て、無二無三に斬り込んで行けば、敵を破ること疑いなしと云えよう。総じてこの類のことは、なおいくらでもあるだろう。呉の人は、不亀手（てのかかまぬ）（＝手がかじかまない）の薬を製作して、多くの水戦を有利にしたこともある。皆、良将の一時の謀才により出ずることと知るべし。

○いずれの戦場へも近習、小姓等の中から監軍（めっけ）として、二人を一組にして、二組も三組も遣わして、その日の合戦の次第、又は諸軍が剛毅か臆病かを共に記録して、大将に上申させる。これは頭々から申し上がる趣意書と附合するか、しないかを見合わせるため、又は諸軍士が自分の頭の他にも監軍（めっけ）がいると思えば、一層油断なく戦に身を入れるものでもあり、こうした様々な目的で用いるのである。

第二巻終